

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

月夜に七人の子どもが歩いておりました。

大きい子どもも小さい子どももまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子どもたちのかげは短く地べたにうつりました。

子どもたちはじぶんじぶんのかげをみて、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

そこで、おかしくなって、笑い出す子もありました。あまりかつこうがよくないので①二三歩はしつてみる子もありました。

こんな月夜には、子どもたちは何か夢みたいなことを考えがちでありました。

子どもたちは小さい村から、半里（＝約二キロメートル）ばかりはなれた本郷へ、夜のお祭りをみにゆくところでした。

②切通しをのぼると、かそかな春の夜風につて、ひゅうひやりやりやと笛の音が聞こえてきました。

③子どもたちの足はしぜんにはやくなりました。

「文六ちゃん、早くこい」とほかの子どもがよびました。

文六ちゃんは月の光でも、やせつぼちで、色の白い、眼玉の大きいことのわかる子どもです。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「んでもおれ、おつ母ちゃんの下駄だもん」

と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとなの下駄がはかれていました。

本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子どもたちはその店にはいつてゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんにたのまれたのです。

「あのいの、おばさん」

と、義則君が口をとがらして下駄屋のおばさんにいいました。

「こいつのいの、樽屋の清さの子どもだけどのいの、下駄を一足やつとくれや。あとから、おつ母さんが銭もつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子どもがよくみえるように、まえへおしだしました。それは文六ちゃんでした。文六ちゃんは二つばかりまばたきしてつつ立っていました。

おばさんは笑いだして、下駄を棚からおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあててみなければわかりません。義則君が、お父さんかなんぞのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがつてくれました。何しろ文六ちゃんは、ひとりきりの子どもで、甘えん坊でした。

ちようど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰のまがつたおばあさんが下駄屋さんにはいつてきました。そしておばあさんはふとこんなことをいうのです。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩げ（＝夕暮れ）に新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」

子どもたちはびつくりしておばあさんの顔をみました。

「嘘だ、そんなこと」

とやがて義則君がいいました。

「迷信だ」

とほかのひとりがいいました。

それでも③子どもたちの顔には何か心配な色があったよつていました。

「ようし、そいじゃ、おばさんがまじないしてやろう」

と、下駄屋のおばさんが口軽くいいました。

おばさんは、マッチを一本するまねして、文六ちゃんの新しい下駄のうらに、ちよつとさわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐も狸もつきやしん（＝つきはしない）」

そこで子どもたちは下駄屋さんを出ました。

子どもたちは綿菓子（注2）をたべながら、稚児（注3）さんが二つの扇（おうち）を、眼にもとまらぬはやさでまわしながら、舞台の上で舞うのを見ていました。その稚児さんは、おしろいをぬりこくつて顔をいろどつていけるけれど、よくみると、お多福湯のトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」とささやきあつたりしました。

稚児さん（注4）をみてるの（注5）にあく（＝あき）と、くらいところ（注6）にいつて、鼠（ねずみ）花火をはじかせたり、かんしゃく玉（注7）を石垣（いしがき）にぶつかけたりしました。

舞台を照らすあかるい電燈（でんとう）には、虫（むし）がいつぱいきて、そのまわりをめぐるていました。みると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色の蛾（か）がびつたりはりつていました。

山車（やまぐるま）の鼻先のせまいところ（注8）で、人形の三番叟（さんぼうそう）（注9）がおどりはじめるところは、すこし、お宮の境内（みやの境内）の人も少なくなつたようでした。花火や、ゴム風船の音もへつたようでした。

人形はおとなも子どもともつかぬ顔をしています。その黒い眼は生きておるとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形をおどらす人がうしろで糸（いと）をひくのです。子どもたちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子どもたちは、なんだか、ものがないような、ぶきみなような気がします。

するととつぜん、パクツと人形が口をあきペロツと舌を出し、あつというまに、もとのように口をとじてしまいました。まっかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやつたことです。子どもたちはよく知っています。④ひるまなら、子どもたちはおもしろがつて、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子どもたちは、いまは笑いませんでした。ちようちんの光の中で、——かげの多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきたしたり、ペロツと舌を出したりする人形……なんというぶきみなものでしょう。

⑤ 子どもたちは思い出しました。文六ちゃんの新しい下駄のことを、晩げに新しい下駄をおろすものは狐につかれるといったあのおばあさんのことを。

子どもたちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里の、野中の道があったことにも気がつきました。

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子どもたちは、だまつて——ちようどひとりひとりが、じぶんのころの中をのぞいてでもいるように、だまつて歩いていました。

切通し坂の上に来たとき、ひとりの子が、もうひとりの子の耳に口をよせて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいつて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。

——こうして、文六ちゃんのほか、子どもたちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえしました。

それはこういうことだったのです。「下駄屋さんのおばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマツチをすつておまじないをしやしんだつた（＝しはしなかつた）。まねごとをしただけだつた。」

それから子どもたちはまたひっそり歩いてゆきました。ひっそりしていると子どもたちは考えておりました。

——狐につかれるというのはどんなことかしらん。文六ちゃんの中に狐がいることだろうか。文六ちゃんの姿や形はそのままでいて、心は狐になってしまふことだろうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんに狐につかれていられるかもしれないわけだ。文六ちゃんはだまつていられるからわからないが、心の中はもう狐になってしまっているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、同じ野中の道では、だれでもおなじようなことを考えるものです。⑥そこでみんなの足はしぜんにはやくなりました。

ぐるりを低い桃の木でとりまかれた池のそばへ、道がきたときでした。子どもたちの中でだれかが、

⑦A「コン」

と小さい咳をしました。

ひっそり歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子どもたちは、いまの咳はだれがしたか、こっそり調べました。すると——文六ちゃんがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子どもたちは考えました。よく考えてみるとそれは咳ではなかつたようでした、狐の鳴き声のようでした。

⑦B「コン」

とまた文六ちゃんがいきました。

文六ちゃんは狐になってしまったと子どもたちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はいつていると、みんなはおそろしく思いました。

樽屋の文六ちゃんの家は、みんなの家とはすこしはなれたところにあつた。ひろい、みかん畑になっている屋敷にかこわれて、一軒きり、谷地（＝湿地帯）にぽつんと立っていました。子どもたちはいつも、水車のところからすこしまわりみちして、文六ちゃんを、その

家の門口まで送つてやることにしていました。なぜなら、文六ちゃんは樽屋の清六さんのひとりきりのだいいな坊ちゃん（ぼや）で、甘えん坊だからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、みかんやお菓子（かし）をみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやつてくれとたのみにくるからです。今晚も、お祭りにゆくときには、その門口まで、文六ちゃんをむかえにいつてやつたのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところにきました。水車の横から細い道がわかれて草の中を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんの家にく道です。

ところが、今夜はだれも、文六ちゃんのことをわすれてしまったかのように、送つてゆくこうとするものがありません。わすれたところではありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつもの親切な義則君だけは、こちらへきてくれるだろうと思つて、うしろをむきむき、水車のかけになつてゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといつしよにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとりで、月にあかるい谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。どこかで、蛙（かえる）がくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、だれも送つてくれなくても、困るわけではないのです。だが、いつもは送つてくれたのです、今夜にかぎつておくつてくれないうのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちゃんと知つていれるのです、みんなが、じぶんの下駄のことでなんといいかわしたか、また、じぶんが咳をしたためにどういうことになつたかを。

祭りにゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐にとりつかれたかしのために、もうだれひとりかえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなげないのでした。

義則君なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着ている羽織をぬいでかしてくれたものでした（田舎の少年は寒いとき、洋服の上に羽織を着ています）。それなのに、今夜は、⑧文六ちゃんが、いくらか咳をしても羽織をかしてやろうとはいひませんでした。

文六ちゃんの屋敷の外がこいになつていいる横（よこ）のいけがきのところにきました。背戸口（＝裏口）の方の小さい木戸をあけて中にはいりながら、⑨文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師（かげぼうし）をみてふと、ある心配を感じました。

——ひよつとすると、じぶんはほんとうに狐につかれていられるかもしれない、ということでした。そうすると、⑩お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした。

お父さんが樽屋さんの組合へいつて、今晚はまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさきにやすむことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといつしよにねるのです。ひとり子ですからしかたないのです。

「さあ、お祭りの話を、母ちゃんにきかしておくれ」

とお母さんは、文六ちゃんのねまきのえりを合わせてやりながらいい

ました。

文六ちゃん、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画をみれば映画のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手ですから、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さんは、とてもおもしろがって、よこんで文六ちゃんの話を書い
てくれるのでした。

「神子^{かみこ}さんね、あれよくみたら、お多福湯のトネ子^{とねこ}だったよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、といって、おもしろそうに笑って、

「それから、もうだれが出たかわからなかったかい」

とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼を大きくみひらいて、じつとしていましたが、やがて、祭りの話はやめて、こんなことをい
いだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄をおろすと、狐につかれる？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思つて、しばらく、あつけにとられて文六ちゃんの顔をみていましたが、今晚、文六ちゃん
の身の上に、おおよそこんなことが起こったか、けんとうがつきま
した。

「だれがそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになつて、じぶんのさきの問いをくりかえしまし
た。

「ほんと？」

「嘘だよ、そんなこと。むかしの人がそんなことをいっただけだよ」
「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きつとだね」

「きつと」

しばらく文六ちゃんはだまつていました。だまつているあいだに、
大きい眼玉が二度ぐるりぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとだったらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえました。

「もし、ぼくが、ほんとに狐になつちやったらどうする？」

お母さんは、⑩ A しんからおかしいように笑いました。

「ね、ね、ね」

と文六ちゃんは、ちよつとてれくさいような顔をして、お母さんの胸
を両手でぐんぐんおしました。

「そうさね」と、お母さんはちよつと考えていてからいいました、「そ
したら、もう、家におくわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

「鴉根山^{からすね}の方にゆけば、いまでも狐がいるそうだから、そっちへゆ
くさ」

「母ちゃんや父ちゃんはどうする？」

するとお母さんは、⑪ B おとなが子どもをからかうときにするよう
に、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく（＝もつともらしく）、
「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあい文六が、狐になつて

しまったから、わたしたちもこの世になんのたのしみもなくなつてしま
つたで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、ふたりで、明日^{あした}の晩げに下駄屋さんから新しい下駄を買つて
きて、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉
根の方へゆきましょう」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根^{からすね}って、西の方？」

「成岩^{なりい}から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木がはえているところだよ」

「狐師^{きよし}はいない？」

「狐師^{きよし}って鉄砲^{てつぽう}打ちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「狐師^{きよし}が撃ち^うきたら、母ちゃんどうしよう？」

「深い 洞穴^{ほら}の中にはいつて三人で小さくなつていればみつからない
よ」

「でも、雪がふると餌^{えさ}がなくなるでしょう。餌をひろいに出たとき狐
師の犬にみつかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走つてにげましょう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんははやいでいいけど、ぼくは子どもの狐
だもん、おくられてしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱつてあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろにきたら？」

お母さんはちよつとだまつていました。それから、ゆつくりいいま
した。⑫ C もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、^注びつこをひいてゆつくりいきましよう」

「どうして？」

「大は母ちゃんにかみつくでしょう、そのうちに狐師がきて、母ちゃん
をしはつてゆくでしょう。そのあいだに、坊やとお父ちゃんにはげ
てしまふのだよ」

文六ちゃんはびつくりしてお母さんの顔をまじまじとみました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしにな
つてしまふじゃないか」

「でも、そうするよりしょうがないよ、母ちゃんはびつこをひきひき
ゆつくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしょうがないよ、母ちゃんは、びつこをひきひき
ゆつくりゆく……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。
涙^{なみだ}がどつと流れてきました。

⑬ お母さんも、ねまきのそででこつそり眼のふちをふきました。そ
して文六ちゃんがはねとばした、小さい枕^{まくら}をひろつて、あたまの下
にあてがってやりました。

（新美南吉『狐』）

※本文の一部に不適切と思われる表現があるが、時代背景を考慮し
そのままとした。」

【注意】答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

注1 切通しⅡ山や丘を切り開いて通した道路。

注2 稚児Ⅱ祭りのとき、美しく装って参加する児童。

注3 山車Ⅱ祭りのとき、人形などをのせ練り歩く屋台。

注4 人形の三番叟Ⅱめでたい舞をする、糸であやつる人形。

注5 くくみ声Ⅱ口のなかにこもってはつきりしない声。

注6 神子Ⅱ神社に仕え、神職を補助する女性。

注7 びっこⅡ足を痛めてひきずりながら歩く様子。

問1 傍線①「二三歩はしつてみる子もありました」とあるが、「二三歩はしつ」た子はどんなことを期待してそうしたのか、わかりやすく説明しなさい。

問2 傍線②「子どもたちの足はしぜんにはやくなりました」とあるが、それはどうしてか、答えなさい。

問3 傍線③「子どもたちの顔には何か心配な色がたどっていました」とあるが、それはどうしてか、説明しなさい。

問4 傍線④「ひるまなら、子どもたちはおもしろがって、ゲラゲラ笑うのです」とあるが、どうして「ひるま」だとそうなるのか、答えなさい。

問5 傍線⑤「――子どもたちは思い出しました」とあるが、どうしてこの場面で「思い出し」たのか、説明しなさい。

問6 傍線⑥「そこでみんなの足はしぜんにはやくなりました」とあるが、それはどうしてか、答えなさい。

問7 傍線⑦A「コン」と小さい咳をしました・傍線⑦B「コン」とまた文六ちゃんがいきました」とあるが、「咳をしました」から「いきました」という表現が変わっているのはどうしてか、説明しなさい。

問8 傍線⑧「文六ちゃんが、いくら咳をしても羽織をかしてやろうとはいいませんでした」とあるが、それはどうしてか、答えなさい。

問9 傍線⑨「文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師をみてふと、ある心配を感じました」について、「影法師」とは影を人のように表した言い方であるが、ここで「小さい影法師」を見て、文六ちゃんがある心配を感じたのはどうしてか、答えなさい。

問10 傍線⑩「お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした」とあるが、文六ちゃんはお父さんやお母さんがどうすることをもっともおおそれているのか、答えなさい。

問11 傍線⑪A「しんからおかしいように笑いました」・⑪B「おとなが子どもをからかうときにするように、たいへんまじめな顔で」・⑪C「もうしんからまじめな声でした」とあるが、お母さんの気持ちとはどのように変わってきているか、わかりやすく説明しなさい。

問12 傍線⑫「お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました」とあるが、この時のお母さんの気持ちを説明しなさい。

【二】 次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はカタカナに直しなさい。

① 乱れた呼吸をトトノえる。

② オウフクはがきの返事を出す。

③ 自然科学の学問をオサめる。

④ 混乱しないようにチヨウテイする。

⑤ コショウした機械を別の場所に移す。

⑥ よりカイテキな生活を求める。

⑦ 世にハクシキをもって知られる。

⑧ 委員長をセンシユツする。

⑨ コジンの墓参りをする。

⑩ シンゾウの病気を心配する。

⑪ 月のウラガワの写真を見る。

⑫ 努力の大切さをツウセツに思う。

⑬ ネコの額ほどの庭を耕す。

⑭ 勇気を奮い立たせる。

⑮ 人の心を和らげる。

⑯ 卵黄を使って料理する。

⑰ 深い信頼関係を築く。

⑱ 医は仁術である。

⑲ 手続きを省く。

⑳ 見物人が群がる。

一

問 12	問 11	問 10	問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1

二

⑬	⑨	⑤	①
			える
⑬	⑩	⑥	②
	い		
⑬	⑪	⑦	③
く	うける		める
⑬	⑫	⑧	④
がる			